

<p>上演 12</p> <p>2022年8月 2日(月) 2校目</p> <p>関東 ブロック (茨城県)</p> <p>茨城県立 日立第一 高等学校</p> <p>「なぜ茨城は魅力度ランキング最下位なのか？」</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(岡山県) 岡山学芸館高等学校</p> <p>古井 栞音</p>
--	--

色々なものがランキングにされるこの世の中で、本当に大切にすべきものが一体何なのか、ということを強く考えさせられた作品であった。

都道府県魅力度ランキング 47 位の茨城県。そんな茨城県出身の茨城多栄子は都道府県魅力度コンテストという校内イベントの結果がスクールカーストに反映される東京お紅茶の水女学園に入学した。コンテストグランプリの東京一華に勝つべく、ヒカルという謎の人物による指導の下、46 位の佐賀佳乃と共に多栄子は奮闘する。

冒頭からラストまで、コメディ要素がふんだんに散りばめられた作品で、観客の心をずっと離さなかった。例えば、ホリゾントに明るい色を多く使ったり、コンテストが始まった瞬間にミラーボールが出てきたりと、観客を楽しませる工夫がたくさんあった。また、コンテストは、音響や照明、そしてヒカルの見事なMCによって、臨場感溢れるものとなっており、見ごたえがあった。

講評委員からは、劇中に出てきた様々な方言がとても印象に残っている、という意見が出た。登場人物それぞれが、地元の方言を使って会話することで、個性が際立っていた。多栄子がピンチに瀕した際に、佐賀とヒカルが茨城弁で「多栄子、がんばっぺ！」と応援していたその姿からは、彼女たちの心の距離が縮まっていたことを示していた。

ヒカルという存在は、多栄子の母が現世に現れた姿ではないかと受け取った。もしそうであれば、“茨城ヒカル”となり、茨城県がより輝くことを暗示しているのではないかと感じた。幼いころに母と死別している多栄子は、母のレシピ本を形見として大切にしている。母の味である「レンコンのきんぴら」で一華に勝利したものの、多栄子の父のセリフ「まだまだ母の味には及ばない」から、茨城家が培ってきた思い出や愛情がいかに深いものであるかを伺うことができた。

数字で物事を比較し、順位付けして捉えることは、この先も続いていくだろう。しかし、そんな世の中でも、数字に左右されず、自分の気持ちを大切にすることこそが重要であると感じさせられた。多栄子がレンコン農家を継ぎたい理由が、「生産量一位だから」から「好きだから」に変化したことは、多栄子自身が大きく成長した証であることを観客に印象付けた。

多栄子や佐賀がコンテストを通じて、自分の好きなものを見つけ、全力でアピールする姿から、私たちの地元の魅力について深く考えなおすきっかけとなった。個性やパッションが持つ力を感じ、ナンバーワンよりもオンリーワンであることを大切にしたい、そう強く思わせてくれた作品であった。